

学生にクリティカルシンキングを促すための授業実践

Practice to Facilitate Students' Critical Thinking

若山 昇^{*1}, 立野 貴之^{*2}
 Noboru WAKAYAMA^{*1}, Takashi TACHINO^{*2}
^{*1} 帝京大学
^{*1} Teikyo University
^{*2} 岡山県立大学
^{*2} Okayama Prefectural University
 Email: nwakayam@main.teikyo-u.ac.jp

あらまし：情報を取捨選択し活用する能力が求められており、まず情報を鵜呑みにせず批判的に捉えることが重要となっている。一方クリティカルシンキングは授業を行うことにより向上すると報告されている。本研究の目的は、クリティカルシンキングの授業で学生が立ち止まって疑問点や問題点を考えることを促すことで、情報を鵜呑みにせず、学生によるクリティカルシンキングが促進されることを考察する。その結果、学生は省察し、疑わしい情報を「鵜呑み」⇒「疑わしい」⇒「虚構である」と、批判的に捉えることが促進される可能性が示唆された。

キーワード：クリティカルシンキング、大学、授業、情報

1. はじめに

さまざまな情報が溢れている現代社会においては、自分で必要な情報を取捨選択し、自ら活用する能力が求められている。学士力においても情報リテラシーとして ICT を用いて多様な情報を収集・分析して的確に判断することが求められている。そのためには、まず情報を批判的に考えて取り入れることが重要となる。一方、クリティカルシンキング（批判的思考、以下「CT」という）は、大学の授業を通して向上する（若山 2009）。また、授業に CT を取り入れることで学生は情報に対して疑いを持つようになる可能性がある（立野ほか 2012）。では、CT の授業によって、学生はどのように情報を批判的に捉えることができるようになるのだろうか。なお、CT は、先入観に囚われず、論理的に考え、合理的な決定を導き出す能力と意思である（若山 2009）。

2. 研究目的

本研究の目的は、学生が立ち止まって疑問点や問題点を考えることを促すことで、情報を鵜呑みにせず、学生による CT が促進されることを考察する。

3. 研究方法

3.1 調査方法

A 大学で 2012 年 10 月に行われた 2 年次対象の授業で、敢えて Web から入手した信憑性のない新聞記

事（以下、「虚構記事」という）を授業題材にした。まず学生に虚構記事を渡して読んでもらう。教員はその疑問点、問題点は何か等の設問を教室内のスクリーンに提示し、学生は無記名で自分のケータイから Web の解答欄に解答を送ることとした。実験参加者の追跡は、授業開始時に配布したトランプのマークと数で行った。学生が立ち止まって疑問点や問題点を考えることを促すことで、学生による記事の信憑性判断がどのように変化していくのを分析した。なお、倫理的配慮として教育・研究以外に使用せず、成績に無関係であり、記入内容の利用を望まない場合には成績発表の後でも教員に連絡する旨を説明した。さらに、授業開始時には、先入観や常識に囚われず、情報に騙されることなく、必要な情報を取捨選択し分析することが大切であり、そのため CT を学ぶことを伝えた。

3.2 学生への設問

設問と設問の間隔は、約 7 分である。その間は、内容についての解説・説明は一切行っていない。

- 設問 1. 学部, 学年, 性別を記入してください。
- 設問 2. この記事について、あなたの意見や感想を自由に述べてください。
- 設問 3. このニュースの内容に関する疑問点を、箇条書きであげてください。
- 設問 4. この記事について、あなたの意見や感想を自由に述べてください。（設問 2 と同一）

- 設問 5. このニュースの内容に関する問題点を、簡条書きであげてください。
 - 設問 6. この記事について、あなたの意見や感想を自由に述べてください。（設問 2 と同一）
- ＜設問 6 の解答後、記事が虚構であることを説明＞
- 設問 7. なぜ、間違えてしまったのだろうか？理由を簡条書きで書いてください。

4. 結果

最初から最後まで概ね 8 割程度の学生は「記事が疑わしい」とは考えていない(図 1). その理由は、「記事は正しいという常識に縛られていた」「疑うことしなかったから」等、先入観によるものが多かった。しかし、設問番号の増加とともに、疑わしい・虚構記事と考えた人数が増え、対応のある有意な増加を示した ($t(30)=2.26, p<.05$). また、設問の過程で記事の虚構を見抜いた学生は「なぜ、バブル崩壊後に不良債権化した土地を買い取るようなことを続けたのか？」のように、疑問を強く投げかけていた。

5. 考察

最初に「記事を鵜呑みにした」学生の 9 割以上が最後まで鵜呑みし続けたことは、先入観による判断を変えることが、とても困難であることが窺える。

情報を鵜呑みするという推論の罠に陥らないためには、まず立ち止まっての再考するのが良い(若山 2013). 今回は学生が次のように思考を促したと推察される. ①設問内容に沿って、疑問点は何か? 問題点は何か? と立ち止まって思考する. ②これにより省察的、批判的に情報を捉えようとする. ③その結果、記事に対する疑いを増加させる. 一方、授業進行による累積思考時間の増加や、設問自体の反復効果の影響も否定できない. しかし、立ち止まって疑問点や問題点を学生が考えることで、結果として(1) 学生が情報を鵜呑みにせず省察し、(2)「鵜呑み」⇒「疑わしい」⇒「虚構である」と、批判的に捉えることが促進される可能性が示唆された。

参考文献

- (1) 若山昇: “大学におけるクリティカルシンキング演習授業の効果 -クリティカルシンキングに対する志向性と認知欲求の変化から-”, 大学教育学会, Vol.31, No.1, pp.145-153 (2009)
- (2) 立野貴之, 若山昇: “情報を批判的に読み取る力をつけるための教育に関する一考察—クリティカルシンキングの授業実践例”, 教育システム情報学会 第 37 回全国大会予稿集, pp144-145 (2012)
- (3) 若山昇: “誰でもわかるクリティカルシンキング”, 北樹出版, 東京 (2013)

